

中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』

世界思想社，1997，278頁，2300円

星野 靖二

本書は、題名にあるように「宗教」と「ナショナリズム」との相関を考察するものである。構成は以下のようになっている：

序 宗教・民族・ナショナリズム（中野毅）

I 海外における宗教とナショナリズム

「東欧における宗教とナショナリズム」（新免光比呂）

「イギリスにおける宗教と国家的アイデンティティ」（山中弘）

「アメリカにおける第二期宗教右翼の政治参加」（上坂昇）

「反カルト運動とアメリカ・ナショナリズム」（中野毅）

「南・東南アジアの宗教と民族・ナショナリズム」（杉本良男）

「韓国の宗教と民族・ナショナリズム」（崔吉城）

II 日本における宗教とナショナリズム

「在日コリアンの祭りと「民族」（飯田剛史）

「近代日本のナショナリズムと天皇制」（粟津賢太）

「現代日本の反世俗主義とナショナリズム」（島蘭進）

「現代日本の文化ナショナリズム」（吉野耕作）

「文化ナショナリズムと宗教運動」（宮永國子）

序において編纂の意図とナショナリズム研究に関わる諸概念を整理し、その後I部において海外の事例を、II部において現代日本における事例を考察している。まず編纂の意図などを含めて本書を全体として紹介し、適宜何本かの論文について述べる。

まず本書の編纂の意図の一つとして、ナショナリズムの問題に対して宗教の側から切り口を模索するというものがあるが、一般に「宗教」と「ナショナリズム」の関係を考える際には二通りの観点を想定することができる。すなわち一つはナショナリズムの現れかたと宗教との相関を考察する観点であり、これは通常キリスト教やイスラームといった既成宗教が問題とされる。そしてもう一つはナショナリズムの現れかたを宗教的なものとして考察する観点であり、ナショナリズムそのものになんらかの宗教性が見出される。

両観点は重複しうるが（既成宗教と関連して形成されたナショナリズムに宗教性を見ることは可能である）、従来の社会学的ナショナリズム研究の文脈で宗教を扱う際には、主に前者の観点がとられてきた。本書には両方の観点からの論文が所収されているが、編纂の意図としては社会学を念頭に置いて前者の観点を重要視しているように思われる。故にまず前者の観点と上述の編纂の意図との相関を取り上げる（後者の観点については後述する）。

前者の観点からの従来のナショナリズム研究の中には、宗教を独立変数とせず、宗教的権威が正当性を確証するために、政治的動員を行う際に有効な手段の一つとなりうるとするものもある。また実際に本書においても宗教を切り口にすることの妥当性やその適応される範囲を注意深く限定している論者も見受けられる。

しかしそのような見解は、何故に他の物でなく宗教が採用されるのかという問いに明瞭な答えを与えない。実際の現場のレベルで宗教に裏打ちされたナショナリズムが人々に受け入れられていく背景を考えるならば、そこに政治的動員という見地からは割り切ることのできない何かがあるのではないだろうか。そしてそう考えることで初めて、従来の政治学・社会学・国際関係論といった視点以外からの、新たな切り口による宗教学的ナショナリズム研究をいう中野氏の言葉が重みを持つのではないだろうか。

もちろん、そのような新たな切り口は先行研究の積み重ねを踏まえた上で模索されなくてはならない。本書では中野氏による序と吉野論文が諸概念の整理を行っているが、例えば吉野氏の『文化ナショナリズムの社会学』（名古屋大学出版会、1997）などは更なる理解の助けになるだろう。

それでは、このように宗教学的の独自の視点の必要性を述べた後で、具体的にはどのような研究を今後行っていくべきであろうか。必ずしも明瞭に打ち出されているわけではないが、それでも事例を踏まえた各論文から、まず大前提となる宗教の捉え方の問題についての示唆と、そして今後さらに掘り下げられていくべき方向性をいくつかすくいあげることができる。

宗教の捉え方の問題としては、いわゆる既成宗教よりも広い意味で宗教を捉えていく視点を見ることができる。冒頭で宗教とナショナリズムの捉え方としては、一般に既成宗教とナショナリズムとの相関が想定されることを述べたが、より広く国家的アイデンティティの基盤となっている文化的な枠組みといったものを、宗教という切り口によって見ていく立場である。

例えば山中論文はイギリスにおける国家アイデンティティの形成に果たしている宗教の役割を考察するものだが、同論文で使用される「宗教」概念は「国民をイギリスという一つの共同体にまとめ国家の文化的枠組みを規定している象徴や国家的儀礼という意味も含」むものである。山中氏は、イギリスではイギリス国教会などの特定の教派や伝統的な教義から離れた広い意味でのキリスト教や、王室をめぐる国家儀礼などが文化的枠組として国家アイデンティティを支えてきたという。そして歴史的な背景として大英帝国の伸張がキリスト教の宣教という名目によって正当化されていたことなどを指摘している。

更にある特定の宗教伝統と関連した国家アイデンティティのあり方は、イスラームなど他宗教の移民によって新たに問い直されているとし、具体的な事例として教育問題を挙げて、キリスト教的宗教伝統に基づく学校が特権的に補助を受けている事に対して一部のイスラーム急進派のグループが異議を唱えていることを指摘している。またこれに対してイギリスの保守派が、キリスト教的な宗教伝統がイギリスという国家の根本にあるものとしていることをいい、1988年当時のサッチャー政権がキリスト教教育の重要性を確認したことを述べている。

このように同論文はキリスト教的な伝統と結びついた国家アイデンティティが形成され、そし

て問い直されてきた過程を概観する。イギリス人はキリスト教徒であるべきであるという保守派の主張を、一つの文化ナショナリズムの現れであると考えれば、そこに広い意味での宗教がナショナリズムを形成する下地になる可能性と、それが差別を生み出す可能性とを見ることができらう。

この文化ナショナリズムと差別については中野論文が示唆的である。中野氏はまずアメリカに「神の国」概念を一つの建国神話としてピューリタンの原理をアメリカ的伝統としてとらえる風潮が存続していることをいい、山中論文同様に既成の教派と直接に関連しない宗教的な伝統を問題にする。ここで反カルト運動はそのような「古き良きアメリカ」という理想像にそぐわない集団に対する抑圧であり、一つのアメリカ・ナショナリズムの表出であるとされる。

中野氏はこのような反カルト運動を述べるにあたって、まずカルトという用語でどのような集団が表されているのかを概観し、反カルト運動の展開とその特徴を整理している。そして反カルト運動に対する見直しが進められている点についても言及している。

このように同論文は反カルト運動を事例として、あるべきアメリカ像を主張することが、その理想に沿わない少数者への差別につながることをいう。これは文化ナショナリズムの表出が抑圧的になる可能性として、更に他の事例においても考えられるべきであろう。

また、アメリカの事例については、上坂論文が宗教右翼が一定の支持を得て政治に参加していることを述べているが、理想のアメリカ像がある程度キリスト教伝統と関係したものとして受け入れられているという中野氏の指摘を考えあわせるとより興味深いだろう。

次に今後さらに研究されるべき課題の一つとしては暴力と宗教の問題を取り上げることができらう。いくつかの論文にこれに関連する問題意識を読みとることができる。つまりナショナリズムが立ち現れてくる際の具体的な問題の一つである暴力の行使に、宗教がどのように関係してくるのかというものである。

例えば杉本論文は、南・東南アジアの中からスリランカの事例を取り上げている。20世紀半ばにシンハラ人・仏教徒を模範的国民とする政策（「シンハラ唯一政策」）が実施されてタミル人やキリスト教徒などから反発を受けたことをいい、そしてそれに対する政治的譲歩が更にシンハラ人からの再反発を招いて、シンハラ人とタミル人間の対立が激化し、ゲリラ・テロが頻発するに至ったことを述べている。

杉本氏はこのような対立が南アジアから東南アジアに引き起こされた原因としてイスラームが持ち込んだ「宗教＝政治」体制とキリスト教が持ち込んだ「国民国家」理念をあげ、前者に関しては仏教やヒンドゥー教がイスラームと接触することで体系化されて対立を招くようになったことをインドのヒンドゥーなどについて指摘している。

また後者に関しては南・東南アジアにおいて独立運動を担ったエリート層が西洋的教育を受けていたことをまず指摘し、彼らが西洋的な、一つの国家(state)は一つの国民(nation)からなるという国民国家理念に基づいて国家建設を行ったとする。しかし実際にはそのようにして形成された国家(state)の構成員が決して文化的に一様ではなかったことを同地域における紛争の原因として指摘し、スリランカの事例はこれにあてはまるものであると述べる。

このように社会学的・政治学的な分析をふまえた上で、杉本氏は個人の生のレベルにおける宗教について触れる。そこで宗教は、人々に「全面的に依拠すべき世界観」を与え、人々はその侵害に対する反発として暴力を行使しうることをいう。これは言葉としては簡単に「宗教自体に内在する暴力性」と述べられているが、次に述べる主体の形成の問題と関連して更に掘り下げられるべきであろう。

もう一つは、現場においてナショナリズムが主体化されていく際に、宗教がどのように関係していくかという問題である。新免論文はボスニア紛争に見られる旧ユーゴスラビアにおける宗教の復興とナショナリズムの高揚を取り上げているが、新免氏はこれをより大きな東欧全体の枠組みから捉えることで、東欧における民族紛争への宗教の関わりについて考えていくという姿勢をとる。

新免氏は両者の伸張の背景として社会主義の崩壊を受けた価値観の空白を指摘している。特にアンダーソンのようにナショナリズムは特別な理論を必要としないため（『想像の共同体』）、民族の名の下に大衆が情緒的に取り込まれていくことを指摘している。また宗教に関しては、共産主義と西側との関係から大きく三つのグループ（カトリック・プロテスタント、諸正教会、イスラーム）に分けられること、そしてこのように分かれていることが東欧諸国の内部において混乱を生む要因となっていることを述べている。

そしてボスニアの事例と新免氏自身のルーマニア農村での調査体験から、宗教とナショナリズムが紛争に関係してくる具体的な例として共同体における暴力の行使をとりあげている。「われわれ」と「彼ら」が昨日まで共存していた共同体において対立が顕現する背景の一つとして、宗教が儀礼という目に見える形で潜在的に民族を区別していることにふれ、そして他者との差異の認識からくる漠然とした不安と恐怖が、噂や報道によってかきたたられ、さらには政治的な意図をもってその報道が操作されることによって相乗的に増幅され、最終的に暴力の応酬のループに到る過程について言及している。

ルーマニアの調査の事例においては、ルーマニア人は正教会の教会に行き、ハンガリー人はカトリックもしくはプロテスタントの教会に行く、というように違いが比較的わかりやすい。よって宗教が潜在的に民族を区別していることをこの事例においてはいうことができるだろうが、これを他の地域の事例に無条件に適用するべきではないだろう。

しかし新免氏の考察でより重要なのは、噂や報道によるイメージの形成や、政治的意図に基づくイメージの操作が、宗教を利用して行われる可能性を指摘していることである。これは潜在的な区別が実際にあるかどうかを問題とするものではない。この点はナショナリズムと宗教を考える際に考慮されるべきであり、各事例ごとに具体的なプロセスをより細かく検証することによってすくい上げることができる問題であろう。

また、そのようなメディアと関連して形成されるイメージの問題については粟津論文が特に示唆的である。同論文はナショナリズムを主権のイデオロギー的根拠としてとらえ、近代日本と天皇制を事例として述べるものだが、特に昭和天皇の崩御後の一連の報道について、メディアがT・フジタニ（『天皇のペーजेント』）のいう一つの「支配的な物語」の中に対立要素を取り込んで

いく過程を指摘する。このようなメディアの働きは現代のナショナリズムを考える際に考えなくてはならないだろう。

さらに前述したナショナリズムそのものに宗教性を見出すアプローチも、一つの宗教学的な切り口として深められるべきである。飯田論文はこの点に自覚的であり、「「宗教」を特定の宗教人口ないし宗教集団ととらえ、それと「民族」との関連を解明する方法」ではない「象徴的実在としての「民族」の内在的要因として「聖なるもの」の動態をとらえる視点」をとる旨を述べる。同論文はデュルケム―ベラー的な立場に依って、民族主義を宗教と同様の聖なる特徴を付与された象徴的実在として取り上げ、民族主義における「民族」が聖なるものとして直接に神聖化されうとする。そして在日コリアンによって近年に創出されてきた各種の「祭り」が、そのように「民族」を神聖化し、参加者にそれを自覚的に意識させる契機の一つとなっている点について、事例による差異を見ながら考察を行っている。同論文のこのようなアプローチは他の事例にも適用しうるだろう。

本書はナショナリズムの事例の多様性を様々なレベルで提示し、問題提起を行っている。そしてそれをどう展開させていくかが、今後の課題として問われるところであろう。各論において個別に今後の展望が提示されていることから、例えば論者間の座談会などがあれば興味深かったと考えるが、いずれにせよこれは研究者各自が考えていかななくてはならないところだろう。